

『#白鷺立つ』（住田祐著、2025 年）を読んだ。著者は、2025 年、本作で第 32 回松本清張賞を受賞しデビュー。

『白鷺立つ』は、天明飢饉の傷跡が残る比叡山延暦寺を舞台に、大阿闍梨を目指し「千日回峰行」に挑む二人の僧侶、恃照と戒闇の物語である。二人は出自に秘密（帝の血を引くが、帝を目指す道は閉ざされ、寺に預けられた身）を持ち、歴史に名を残すための切羽詰まった状況（大阿闍梨になることが唯一の存在証明であるとの思い込み）にあったが、失敗すれば自害しなければならない過酷な修行をめぐり、激しい憎しみ合いを繰り広げる（帝の血を引く者を「千日回峰行」の失敗で自害させるわけにはいけないので、自ずと「千日回峰行」は認めないというのが比叡山の立場であったが、一方で二人は挑戦しようとする構造上の矛盾を抱えているのだ）。

この二人の激しい闘いはやがて比叡山全体を巻き込む「業火」となり、大きな渦を生み出していくという、異様なエネルギーに満ちた歴史小説である。恃照（「千日回峰行」に失敗した師）と戒闇（「千日回峰行」を目指す弟子）の関係が尋常ではない。互いに憎しみを曝け出して、挑み続ける。であるが、最後は清々しい結末となっている。行間に漂う緊張感をもたらす著者の力量はタダモノではない。

「白鷺」とは千日回峰行の達成者の異称。挑む者の白い装束に由来し、優雅なイメージとは裏腹に「立つ」ことが似つかわしい、苛烈な修行を象徴している。

千日回峰行

比叡山山内で行われる、天台宗の回峰行の一つである。満行者は「北嶺大先達大行満大阿闍梨」と称される。「千日」と言われるが実際に歩む日数は「975 日」である。「悟りを得るためではなく、悟りに近づくために課していただく」ことを理解するための行である。

まず、先達から戒を受けて作法と所作を学んだのちに「回峰行初百日」を行う。初百日を満行後に立候補し、先達会議で認められた者が千日回峰行に入る。その後 7 年の間、3 年目までは 1 年あたり 100 日間連続で、4、5 年目は 1 年あたり 200 日間連続で比叡の峰々を歩く。

無動寺での勤行のあと、深夜 2 時に出発する。真言を唱えながら東塔、西塔、横川、日吉大社と 260 箇所を礼拝しながら、約 30km を平均 6 時間で巡拝する。

途中で行を続けられなくなったときは自害することとなっており、そのための「死出紐」と、降魔の剣（短剣）、三途の川の渡り賃である六文銭、埋葬料 10 万円を常時携行する。未熟であることを示すいまだ開き切らない蓮の葉をかたどった笠をかぶり、白装束、草履履きで行う。

5 年 700 日の回峰行を満行すると、最も過酷とされる「堂入り」が行われる。行者は入堂前に生前葬となる「生き葬式」を執り行い、無動寺明王堂で足かけ 9 日かけて断食・断水・不眠・不臥の四無行に入る（ここが一番の難関）。堂入り中は明王堂に五色の幔幕が張られ、行者は日に三度の勤行を修する以外はひたすらに不動明王の真言を唱え続ける。ただし、毎晩深夜 2 時には堂を出て、近くの閼伽井で閼伽水を汲み、堂内の不動明王にこれを供えなければならない。水を汲みに出る以外は、堂中で 10 万遍の不動真言を唱え続ける。堂入りを満行し「堂さがり」すると、行者は生身の不動明王ともいわれる阿闍梨となり、信者達の合掌で迎えられる。これより行者は自分のための自利行から、衆生救済の利他行に入る。

6 年目はこれまでの行程に京都の赤山禅院への往復が加わり、1 日約 60km の行程を 100 日間続ける。

7 年目は 200 日間行い、はじめの 100 日間は全行程 84km の京都大回りで、後半 100 日間は比叡山中 30km の行程に戻る。

満行者は京都御所に土足参内し、加持祈祷を行う。京都御所内は土足厳禁だが満行者のみ特別に許される。

千日回峰行満行者には「十万枚大護摩供」を行う資格が与えられる。十万枚大護摩供とは 8 日間、断食・断水・不眠・不臥で護摩木を十万本以上焚く荒行である（その修業の厳しさから「火あぶり地獄」とも称される）。行者は、不動明王に供える米・大豆・小豆・大麦・小麦の五穀と塩を 100 日間摂取しない「前行」を行う。また入行前に「生き葬式」をしてこれに臨む。

平安時代から始められたこの行を 2 回終えた者は 3 人、3 回終えた者は 1 人、4 回以上終えた者はいない。

評価：★★★★★